



近世说美女年鑑
上編
四



~ 13
3567
34



門 13
號 3567
卷 31

新編 石童子訓卷之十九



東都 曲亭主人人口授編次

野上驛の悪僕悪主と嫌を
立合阪の仁人孝女と憐ぶ
却説多加貞典膳政朝の高嶋一口の両主客の今日君邊の云云
と情地を告て又いふ。我君不明の在れも古語のいふや。昔は蘭船から
まきとれ。秋風是を破り良月明るらまきとれ。浮雲是を掩ふ。せん
内小窓井の方の狐媚あり。外小曾根見の便便あり。君威を借て私情を
行ひ賢良と認て不忠とま。まきとれ。危殃蕭牆の中あり。起りまきとれ。
然るも猶幸小長橋象船の忠あり。義あり。宗金頭顱を喪ひ。君臣
無明の酔醒て玉石亮然らまきとれ。臣の折とぬ。竊や。小諷諫の詞を

五七五字 訓卷之十九

壹

文藝叢書

早稲田 大學 図書館
記 346.3 災
蔵 書

聲一稟一か我君御後悔の色見え。明日の夙め正廳へ訴人等と
 召集合々。邪正を判断せよと仰合せられければ。御前を退かす。
 宿所へいそぐ路の程。這里中亦事ありと罵走る。下司ありと呼留め
 同討ふ。其事詳々。根見健宗の云々とその大畧を知らふ
 足る。非理奸虐の緝捕を。開か儘いらいさまふ。立下り見れば。果
 して事あり。主人危ふかりけん。我より先。一口の資助ふらう。万人毎に
 矢庭へ擲捕とふけん。實ふ公私の幸なる。所以あそありけり。いふれや。と問
 好純然に。曾根見伍六健宗。隊兵多く従へば。我好純を
 理不盡。擲捕まふ。一家見る。奴婢毎に。荆妻を。香華院
 へ赴ら。然らぬ。使女を充られて。左右へ技助る。我身單り。彼
 徒を中る。儘せと投伏々々。當人曾根見健宗と。矢庭へ膝組

布し。曾根見の雜兵。徴むま。蒐るを。防ぐ。開か。程。健宗短刀
 引拔。我太股を刺さ。反復され。と思ふ。小腰刀。とて。健
 宗の利を。曾子へ。縫留る。折も。一口の資助ふらう。万人毎に。送
 り。擲捕れ。有徳。程。荆婦。老僕。若黨。奴隷。皆。か。り。あ。て
 便宜。ゆえ。先家。仙丹。とて。我身の。金瘡。と。療治。る。鬼大夫
 主の。薦め。より。敢。刀。瘡。を。厭ふ。と。目。今。衣。裳。と。更。めて。出。訴。せ。ま。く
 思。折。ら。計。ら。貴。老。問。れ。ら。彼。君。邊。の。秘。事。又。兼。り。一。期。の
 勢。是。小。優。者。の。ひ。と。一。五。十。と。説。示。せ。鬼。大。夫。亦。恭。一。く。政
 朝。ふ。ら。向。ひ。て。在。下。釜。く。茲。不。あ。て。健。宗。を。擲。捕。る。首。の。箇。様。を。入
 と。石。見。父。可。平。と。七。鹿。山。の。椿。事。と。告。め。と。され。り。又。宗。の
 隊。兵。の。彼。山。の。免。れ。と。訴。の。事。の。趣。又。伍。六。健。宗。が。兄。の。伏。兵。と。哄

程不其詰朝佐々木彈正大弼高頼主老黨有司も従へ。正廳小知
 坐あり。家臣賀賀典膳政朝市井司一口鬼大夫安倍等奉りて訴人
 高嶋石見人好純以下曾根見五郎平宗玄の殘兵と罪人曾根見伍
 六郎健宗も局の内召集合て事の邪正と判断せ是より先昨早鹿
 山實檢使遣され有司の奉る彼山の為体と報稟せしめぬ。小
 訴人等の稟も趣と異らむ。宗玄以下當坐命と殞る者も亡骸を
 豺狼もど咬れるもの。或は山脚へ滾落て半死半生るもの。杖けし便
 ちり乘て夫役不昇甘き少の奉る。その他長橋倭太郎勢衆象船弄
 跡知量も彼身千仞の谷へ落て死活と知りぬ。とばえり。其亡骸と索ぬる
 秘るいとも稟け。問話休題當下高嶋石見人の家僕字六可平が
 稟も趣を照据とて七座山の條々と寫さ。一通を口王園と鬼大夫是と

受取て聲高やりの讀記れ。政朝をとり膝と找り。階下へ宗玄の
 殘兵もあり向いて。汝等も頭人。宗玄の俱とて。彼山到りて
 長橋倭太郎。象船弄跡の問答より。大畧の事の邪正を知り。さ
 叨ふ四箇の善少年をも擧捕らむ。欲せし故小毛と吹た。疵と求め。ふ
 あり。その甚麼と。譴問へ。殘兵も。蹶然と頭と低て答る者あり。
 开が中の一箇の老兵の。姑且と陳ぶる。小可も性愚也。理非小箇
 事。小敏ら。宗玄の所便。是守の御説ふと。思ひけ。善善惡
 邪正と。訂問ふ暇も。あら。長橋象船。い。大。江。峰。張。と。飲。り。少
 年。も。擧。捕。ら。ま。く。欲。し。後。悔。臍。と。噓。も。甲。斐。る。只。恩。免。と。願。ふ
 の。と。以。て。の。餘。の。殘。兵。も。異。口。同。容。中。を。陳。し。け。當。下。賀。賀。政。朝。の。局。の
 内。小。幸。居。ら。ま。て。る。罪。人。等。を。口。王。園。と。鬼。大。夫。是。と。れ。曾。根。見。伍。六。郎。健。宗。大。胆

不敵の狼藉（ふて死 うちせま）の今さら（いま）亦（も）ふ（ふ）し（し）も及（およ）び（び）ねど（ねど）。その兄宗玄（あひむねの）の隊兵（たいへい）も入（い）漫（まん）ふ（ふ）一味同意（いちいどうい）させて死（し）す（す）た（た）寛（かん）と倡（あ）て（て）當家（たうけ）二三（二三）の兵頭（へいとう）も高嶋好純（たかしまこうじゆん）と襲（おそ）ひ（ひ）敷（敷）ま（ま）く（く）も（も）。抑狂人（おしきやうじん）の沙汰（さた）中（ちゆう）に大僻（たひやく）不敵（ふてき）の罪人（つみびと）なり（なり）。然（しか）し（し）も今亦（いまも）ふ（ふ）し（し）あり（あり）あるや（あるや）。い（い）ふ（ふ）も（も）や（や）と（と）護（ご）ら（ら）る（る）。健宗（けんそう）僅（わずか）ふ（ふ）頭（とう）を拾（ひろ）ひ（ひ）て（て）升（のぼ）り（り）御談（ごだん）で（で）い（い）へ（へ）ども。我們事（われごと）の虚實（きよじつ）と悟（さと）ら（ら）る（る）。兄（あ）の（の）冤家（あやと）と敷（敷）ま（ま）く（く）も（も）。遺恨（いこん）遣（や）る（る）か（か）ら（ら）ん（ん）故亦（もと）只高嶋好純（たかしまこうじゆん）の鄰國（となりくに）の内應（うちまか）も逆賊（さかぞく）と思錯（おもひまちが）へ（へ）。兄宗玄（あひむねの）は隊兵（たいへい）の送り（おくり）て（て）茲（ここ）に在（あ）り（り）けるを相譚（あひだん）ひ（ひ）り（り）引（ひ）引（ひ）俱（く）して（して）襲（おそ）ひ（ひ）敷（敷）ま（ま）く（く）も（も）。短慮（たんりょ）と後悔（こうかい）あるもの身（み）の錯誤（あやまち）と（と）い（い）ひ（ひ）る（る）。素是（もとこれ）忠義（ちゆうぎ）の爲（ため）なるも。い（い）ふ（ふ）も（も）。亮查（りやうさ）あり（り）。と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。隊の雜兵（ざひへい）もい（い）ふ（ふ）も（も）。と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。悲請（ひせい）を已（や）ま（ま）す（す）。政朝（せいちょう）冷笑（れいせう）ひ（ひ）て（て）其美（そのみ）なり（なり）。只傳聞（ただでんぶん）と實（まこと）と多（おほ）く（く）。その職（しやく）も（も）あら（ら）ざる（ざる）。小重臣（せうぢゆうじん）と敷（敷）ま（ま）く（く）も（も）。罪（つみ）と脱（だつ）る（る）より（より）あ（あ）ら（ら）ぬ（ぬ）。余（あ）る（る）を猶（なほ）

その非（ひ）と飾（かざ）り（り）て（て）忠義（ちゆうぎ）と名（な）に究（きゆう）めて（て）鳥（と）許（こ）し（し）理（り）の闇（やみ）から（ら）愚物（ぐぶつ）の本（ほん）性（せい）尙（なほ）始（はじめ）より（より）如右（ごと）思（おも）つ（つ）る（る）。と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。許稟（こりん）さ（さ）る（る）。み（み）つ（つ）る（る）。恣（し）に（に）是（これ）狼藉（うちせま）あり（り）。と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。言語（げんご）と急迫（きゅうぱく）と責（せ）め（め）せ（せ）ば（ば）健宗（けんそう）も黙然（もくねん）と又（また）頼陳（らいちん）も（も）。其罪（そのつみ）も服（はく）し（し）けり（けり）。當下（たうげ）賀政朝（がせいちょう）の上（の）坐（ま）ふ（ふ）向（むか）ひ（ひ）額（ぬか）と衝（つ）て（て）言（こと）如（ごと）此（ごと）と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。是（こ）非（ひ）の憲断（けんだん）と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。高頼（たかり）霎時（しやくじ）沈吟（しんぎん）して（して）高嶋（たかしま）石見（いし）人（ひと）が告訴（こくそ）の條々（じょうじょう）其照据（しやうこ）分明（めいめい）る（る）。今（いま）も（も）疑（うたが）ふ（ふ）べ（べ）から（ら）。素（もと）より（より）罪（つみ）是（こ）れ（れ）者（もの）へ（へ）又（また）曾根見（そねみ）五郎平（ごらうへい）宗玄（そうげん）の誑（あざむ）き（き）行（な）ひ（ひ）て（て）殺伐（ころせき）を檀（だん）ふ（ふ）る（る）。その罪（つみ）輕（かろ）く（く）も（も）。彼身（かのみ）の既（すで）に七鹿山（しちかさん）中（ちゆう）に長橋（ながはし）保世（たむけよ）太郎（たうらう）象船（しやうせん）弄（あそ）ぶ（ぶ）も（も）。敷（敷）ま（ま）く（く）も（も）。今亦（いまも）罪（つみ）と正（ただ）ま（ま）ら（ら）ず（ず）。其秩禄（しやくりく）を召放（めいほう）ち（ち）て（て）宅眷（たくけん）と他（た）が親（おん）族（しやく）に預（あづ）け（け）措（たく）べ（べ）。就（す）て（て）倭（わ）太郎（たうらう）弄（あそ）ぶ（ぶ）も（も）。心術（しんじゆつ）忠義（ちゆうぎ）の爲（ため）なり（なり）。我（われ）近臣（きんじん）を殺戮（ころり）も（も）。其罪（そのつみ）なり（なり）。と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）。然（しか）し（し）も他（た）の（の）彼山（かのやま）中（ちゆう）に既（すで）に自殺（じそく）の（つ）ま（ま）へ（へ）

のまふ當所帶と没官く。墓碑と建ること許さばく。又曾根見
 宗玄に従ふて七鹿山へ赴て。彼隊の走卒等も疎忽の罪ありとて。宗
 玄の宗玄不隸られて。彼も不従ふ身ゆ。あれが善悪共其頭人の隨意
 せむのあへん。是を以て罪一等と相宥む。今よりの後夫役不倣しく。同
 なく時る。使へし。就中曾根見佐六郎健宗。其罪饒さ。とがえり。と
 くら猶頑童。大人ゆ。亦彼身痛癢と負ぬ。とい。その従兵
 と共侶。姑且獄舎。不敷。在せ。其瘡平愈。たらん時。左も右も
 仍して。人小る。今高嶋好純の訴訟。依る。彼大江杜四郎成勝。峯
 張菜六郎通能。い出處正。死者。多。我思ひ。愆りて。後太郎。等。討
 手。と。消地。彼山。遣。と。千番。悔。も。及。び。が。多。典。膳。石。見。及。も
 との意。と。以て。異日。他。も。往。方。と。知。ら。べ。い。で。よ。の。美。を。傳。へ。よ。か。と。課。せ。

躬身と起し。二の近習と従へ。徐小奥へ退り。この日は。驛。果。の
 けり。介程。窓井。の方。西。首。の。弟。宗。玄。健。宗。が。正。る。事。と。做。出。す。も。
 宗玄。七鹿山。で。戦。死。の。言。え。も。刺。伍。六。健。宗。の。兄。宗。玄。も。弥。増。せ
 る。狼藉。の。罪。免。る。方。なく。躬。死。刑。の。處。せ。られ。んと。人。の。噂。と。生。憎。み。洩
 べし。胸。潰。れ。泣。き。く。も。哀。し。の。遺。漏。る。け。し。左。右。小。君。道。遠。の
 人。を。見。よ。く。消。地。の。美。と。う。ち。歎。け。て。弟。健。宗。の。為。の。美。も。恩。赦。の。制
 定。と。乞。稟。す。の。う。ち。高。頼。介。の。色。不。漏。る。周。君。の。あ。ら。ざ。れ。は。衛。の
 賀。政。朝。の。諫。言。と。聽。し。よ。り。既。昨。非。と。知。り。た。と。婦。言。と。容。れ。と
 念。ぶ。而。已。然。と。楊。大。真。の。馬。塊。の。言。の。覚。し。あ。ら。ね。事。の。極。よ。く
 慰。め。く。い。ふ。も。多。健。宗。と。赦。免。せ。と。思。ふ。程。小。幼。莫。二。十。日。有。餘。と。傳。て
 彼。身。の。金。瘡。餘。波。も。多。瘡。り。果。し。と。安。え。比。有。一。日。賀。政。朝。の。同。僚

麻井我考毛の老黨と共侶不出仕あて高頼主不直承とある。曾根
 見伍六郎健宗の禁獄久き作りひひぬ又蝨く首と刻さるて士民示し
 めらむ乱臣賊子法度と文ありて君父を凌ぐふ至るる法度の君の立
 る所君先是と破りて後不民其法度を破らざる。在昔孔子の魯國不
 相と繞ふ一箇の少正卯と誅して鄰國境を犯さる。國治の民泰かりと
 公より君の知召と所のいづく勸善懲惡の御制度とて願けしと
 憚る色もるる稟あふ高頼勃然と眼と睜りて開ち公の追もる。
 我も亦始より思ひさるふあらねども彼曾根見健宗の尚乳臭死頑立異
 世の男子たる者の年十八九に至るともいふと額髪と剃除る。自ら足と女
 子も擬て罪ありて刑を加む是今の世の通法とて健宗を追
 放せんとと思ふ。汝等あのみをあらるると論貌る。似而非仁義を政朝

推返して又稟をとり。御誼畏ういども健宗少年多きとて死罪一
 等と宥免ある。長橋倭太郎象船并弥も亦額髪ある者あて俱し
 少年よりける君の御意に従ひあらで。驕臣曾根見宗とて數捕り
 ちを罪らして彼自殺を憐とあらむ。他もが後と立べらむ。墓石とても饒さ
 どと掟ありと思ひまれば健宗勢泰長橋知量象船も皆相似る少
 年なることも一人の驕慢二人の忠義善惡邪正ハ明るる。賞罰同ト
 なることもあふ。國民並て訝りて。見公肩の御制度とて稟きづらん。是臣
 等が君の御為ふ恐れ思ふ所と。理りを演て諫。然高頼ゆつて羞
 たる色あり。權且して仰さるる曲。膳の意見宜ふ以所あり。我彼勢泰知
 量のみを忘れり。因今亦是を思ふ。健宗の狼籍ハ兄宗とて枉死の
 故あり。勢泰知量の乱妨ハ善小與して奸を鋤く。義烈といわれもせん。



小せの太

五石童子川巻十九

八
文楽堂蔵



唐二を害し
て伍六郎小雪
太を伴ふ

あの段第十
頁に見えし

唐二

唐二

五石童子川巻十九

文楽堂蔵

けり。あの奉。忠臣ヲ賀政朝の討る所蓋力ありといふ。同話休題小
程小窓井の方ハ屢使君より歎れて。舎弟曾根見健宗の死刑を救
ひ給されとも。一霎時留置置まをして是日追放のゆえあり。かば開去向を
資助んを。腹心の内入るりける。臺床唐二と喚做ま若小機密を叫びあろ
ゆさせく。健宗小贈遺まを金一百兩と短刀一口衣一籠と添劑して他が迹
とを逐せける。健宗いままの美を知らる同惡の殘兵等と共侶一口の隊
兵小追立ちまを。城の郊外東のか。三三重可る申明亭中て並々答放小
せらま。只蜻子房と破り像く。或ハ西或ハ東已が隨意るりて金給く
迹の軍健宗の憫然として立在る。おろろ日景ハ散けとも。身も牢衣
のま小して。今上も後の盤纏小做ま。鏢一文もあるこるけま。いふせま。
と思難て有斯時の凜心氣る。同惡人等の已が自恣立別む。背影と

怨げ小目送り果く。ち咳泣くあり。程前面よりあて来る者有けり。是
則別人ららま。窓井の方小憑ま。密使小立られ。彼臺床唐二近づく
隨小聲と低めて。伍六主恙在まや。這回和君の不造化ハ悔思の。是
非小及びま。然れとも猶幸小よ姉君の在ま。甲斐小首と續ま。のま
らま。惜地小去向を資んと。咱等と使小をま。後上這方へと先小喜
俱小樹蔭小退ま。背のま。祇裏と遠く解下して。懷より一包の
金子と會出ま。遞與ま。健宗の死ハ途。六道能化の地藏菩薩
菩薩の引接小逢ま。心地せる。の歡び大か。るま。満面笑れて。幾遍とる。先
唐二と勞ひ。其金子と數ま。見る小正。是圓金五十枚ありけり。窓
井の方の贈り。二百兩ありけり。唐二不良の猛意の。其半分と掠
合もて。五十金ハ他ハ懷小あり。健宗の。是を知らる。件の金子と受戴て

故の如く紙の包み。犢鼻禪衣結着。袂裏に用紙見ゆる。短
 刀一口と仁田山紬の夾衣二領をる。帯と汗衫と脛衣鼻紙あり。
 其鼻紙の間に密井の方の密書あり。唐二素より是を知らず。健宗
 心とある。衣と脱更んとも。その件の密書の頭れ。健宗早く會揚て
 封皮を折て讀見ゆる。上野の小母君。あはれ下とあはれ其一通も巻入々
 奥のあり。健宗の讀果て。巻返々其書二通を先懐。推容て勃然と
 聲高申す。やれ唐二の欺。我姉よりあはれ。金二百兩をる。金
 半分と推隱。知らぬ。貌も胆の太さ。其の喫つ。疾。唐二の欺。毫も怯ま。冷笑ひ。開る。何を。彼方
 唐二の欺。毫も怯ま。冷笑ひ。開る。何を。彼方
 よの受命りて。とる。這里へ。金子の。五十兩より外。果む疾視て。黙。盗見論。證據我。女兄の密書。不あり。と。

懐より會出。是。听ね。短刀の上野。小父君の紀念。夾衣も
 こと添て。黄金百兩。寫示。知らる。正
 照る。争へ。饒え。詩も。語も。没ら。疾。最。謹
 ら。唐二の口。用紙。それ。辟易。逃。背
 短刀。引拔。激。被。双の精銳。唐二の右の肩尖。七九。前
 ま。斫下。一聲。苦と。叫。果。仰。反。死。當。一箇
 賤男子。年齢。二十。足。面白。月。額。黒。身材。低。骨。立。わ。ら。う。ら
 今。這里。追。放。され。其。一人。と。同。あ。率。衣。の。裳。端。折。て。
 東の方より。健宗の後方。事。の。光。景。見。て。故。馬。の。せ。た
 我。近。死。腰。挟。拭。を。健宗。血。刀。の。鏑。下。より。刀。尖。を。佐。と
 押。拭。夫。夫。の。魂。健宗。亦。介。者。され。訝。り。聲。も。被。け。心

此の隨小拭いせむ。刃と鞋小納ま。六件の賤男子合は矢も。卷よ怪とめ多郎
 君御向追放せられ折のまきまき思ひか。追立の伏兵達小憚りあれ。
 衆人と俱小這頭と立去りて。幾程もろくか。先途の御伴小立心と
 思小孤忠一人當千。那里までも召まよ。健宗見ふて何人あらん。
 思ひ小我兄宗委の鞋奴小雪太了得小健氣小こと。小雪太然小我
 身の被日七鹿山中辛く命を免れて走り交りて。注進ある其折亦郎君の
 高嶋石見と敷きまき。大事の内伴小立る。その甲斐もろく事敗まき。
 主僕殘兵甲乙とろ。一口の隊小搦捕られて。俱小獄舎小敷殺れ。命運
 のまき。蠅まきやあり。主のいら。已まき。恩赦の制度小尾鱈振り。輒の鯽
 魚の江小還る。洪福の猶ありまき。錢をけられ。小あて。投まき。方小。あまき。
 や。思ひ小似む。姉君より。齋一。あひ。黄金菊の花。さ。香。さ。鼻着て。

此の悦と想像る。彼脚をく。よく走り。翅る。あて。飛との頼母兒成
 獲る。小可。ま。心強。かり。定小芽。ま。あ。ふ。あ。と。祝。其。健宗。點頭。て。原。来
 の。皆。知。られ。け。今。あ。秘。ま。く。も。あ。ら。ま。那。唐。二。奴。が。大。胆。ま。昔。兄。より。唱。ま。小
 賜り。金。二。百。兩。ま。と。那。奴。が。半。分。着。腹。ま。ら。頼。陳。と。已。され。怒。小
 棄。て。結。果。け。た。那。懐。あ。の。せ。られ。五。十。金。の。あ。り。や。せ。揚。り。て。見。よ。い。そ。ろ
 其。小。雪。太。の。有。理。ま。と。忘。と。ま。く。享。り。て。臺。床。唐。二。の。亡。骸。と。探。り。て。見。ま。小
 腹。小。纏。る。長。財。囊。あ。る。と。披。出。ま。果。し。て。五。十。金。の。重。み。あ。り。是。る。ま。と。指
 小。ま。と。健宗。ま。ら。受。合。ま。り。て。裏。面。ま。圓。金。と。合。出。て。數。ま。ま。是。も。亦。五。十
 兩。あり。疑。ま。く。我。東。西。の。と。懐。へ。楚。と。挾。め。て。や。小。雪。太。我。の。女。兄。より。贈。ま
 され。衣。の。ま。宜。し。けれ。も。汝。其。牢。衣。も。今。宵。の。宿。小。就。か。げ。ん。那。奴。の
 身。纏。利。合。り。て。开。と。被。更。て。伴。ま。や。亦。只。其。衣。の。ま。ま。那。奴。が。兩。刀。小

買まらふ圓金一枚投與へて歌妓あるやと詔る小這里少介る者多
 とのまて猶飽心地ある主僕只得相酌ふ終日酔と盡を程お問ふ
 時々使う宿婢の困下けん喚ぶも後少物と来む身邊小人在らむ
 時小雪太の聲と低めて登郎君の身盤纏小富めとの今より投てゆ
 方るる廻國せんも妙るるを這美甚麼と請問を健宗の少の其願
 脱落ある死や汝あは告され心許る思えけ上野國甘樂郡部領の
 莊小我小母ありその小母の獨子も鎬野郡司の豪家也半郡二荘の
 主るれば必那里へぬとい我女兄の指揮も隨即小母公贈る召女の書
 翰も在り勿論鎬野郡司のら見小母と父も路遠ければ對面せ
 るのらら這回我女兄の賜りたるの短刀の上野る小母夫の世とあり時
 像見るのそ贈らしたる一口をれば見せまわらせ疑るるとさるかと教示

筆の跡拙みからぬと豫より小母公の認りて在まれば任むる正
 證據のる我身那里小落就ふ郡司のそ汝も侍品も做し給せん
 何等の為小廻國せんやといはるる小喜悦の勝を開き亦妙又最愛
 志然らる喜時はもわらん今一度過ぬねと酔の蟄る虻蜂の回るを
 酒盃の果の送ふ酔臥す日の暮るるとも知らぬける其次の日の天快晴れて薄
 暑路もさく宜しけむ曾根見健宗の其詰朝小雪太と將て旅店と出
 上野へと赴く素素よりいそぐ旅るる路の次の好も死にも神社佛閣名
 所舊迹有とて受け立よて要る脚と弗負ま程小長は日るる三四日
 経る稍美濃路入りより是日野上の驛まで来ふけり在昔這頭
 途人不知らるる然しも風流の數澤るりけ名娼名妓るらるる當時
 野上の花子の詞の夏果る扇と秋の白露といふも先ふは妙の床

實主生志安の歌下下の句所たす
 又平倉盛の愛妓るける池田の熊野が母親の病痾を
 朗詠集及新古今集の悦持
 看とらんそ身の暇とて稟志し小宗盛饒一の御
 惜けとてやまてあまの花や散ららん。とよそて故郷へ還されける其事の
 よの物不見えて且能樂の謡曲も作らざれば世俗知るあり。かくて星程り
 物換りて昔の似るべくもるは享禄天文の比小至りて無下小寂る驛路を
 りもと猶當初の餘波で驛娼土妓のありとをのする。同話休題健宗野
 上と過る折日景の尚高けきとも小雪太の薦めらまそ。磬蟬屋と喚做し
 た依客店小杖を駐りしより驛娼言く口口上せそ。詞せもあ。舞せもあ。他
 御小流浪ふ身と省ぎ健宗も小雪太も年尚二十小足らざるける恋少年の
 癖るま。遙けた旅宿不在る。酒色の為小現る。盤纏の費と物とも
 思ひま逗留四五日小及ぶ程小健宗の夜とる。日とち。酒小耽り色小溺

まく酔ふく臥房小入りより朝寝して日の昇ると知らざ。俺留茲日と
 累ねて第五日との夜分健宗の殊さらぬ泥の如く小酔臥く喚べとも
 絶く覚さざ。鮮語の花小抱きま。軀枕小就けよける有斯けきとも
 小雪太の腹小計較しあま。當晩の疲るるあつと。鮮と驛娼と
 伴る酒醺情果し時次の間小退れ。横見うち被さる獨宿をされ
 と小夜深るま。毫も睡らむ。主の宿息を覗ふ。丑三時候小起て
 来り健宗が枕方の蒲團の下小秘措たる金子のさらし鼻紙裏も竊
 と合りて財囊と共に先懐小林足と挟め。臥簾の屏風小掛りける
 健宗の夾衣と帯を悄地小掖下して。紗袱小包と荷作りて。又両刀を
 漏さるる。竊と腰小挿ま。己が中刀と俱小一口あるま。短刀
 と小肌膚挿ふ。背の方へ隠して帯の菅笠胸祥草鞋を。送る

都て搔攪さうかくひて袱包ふくぱうを搭たか駝た々々。亦また両りやう刀たうと腰こし帯おびでて。簷えん廊らうるる。兩りやう戸こ一いつ枚まいと推おし開ひらけ下くだ立たて。其その庭にわ門かどよりこ。潛ひそ出でるる。東あづまと投なげて走はり去さるる。短みじ夜よ多おほき
 けり。健けん宗そうも其その敵あいつ奴やつも。醉よめゆるる。睡ね端はるる。且まと夢ゆめ中ちゆうも是これと知しらざりけり。余あま
 程ほど小こ雪せつ太たへ連つり小こ路ろと走はり。二ふた四し里りもぬらんと思おもひ程ほど小こ明めい六ろくの鐘かねの音ね
 ぞえて。星ほしの光ひかりも落おちくるる。時とき候ころ前まへ面めんより末すえ等とう一いつ箇この大だい漢かん奴やつあり。廣ひろ袖そでるる
 襪わ襪わ衣い被まて。巾きん袖そでと頬ほ罩さあるる。面おもて色いろ凄せまトとかりけり。と小こ雪せつ太たへ透す見みて。怪あや
 有あるる。奴やつかると思おもひの。路みち狭せまけして。避よるる。由よしり。仍なほ違ちがふる。時とき那な大だい漢かん奴やつも。
 脚あしを飛とりて小こ雪せつ太たの腋わき肚はらを撲た地ちと蹠けるる。蹠けられて何なんく躑こるる。と小こ雪せつ太たへ
 苦あと叫まひも果はるる。身みと輾ころしてて。付つけり。當あた下くだ件けんの大だい漢かん奴やつへ小こ雪せつ太たの懐ふところと。
 搔か撈かり。財さい囊ふるる。金かね子こと速はやくて。抓つかとと出でして。懐ふところもも。四よ下くだと見みぬるる。亦また兩りやう
 刀たうと奪うばりて。己おのれが腰こし小こ佩はい做しるる。袱ふく包ぱうの开ひらきて。隨まるる。奪うばりて背せ駝たへと飽あらる。衣いと

剥むんととあつるる。馬うまの鈴かねの音ね近ちかくきぞ。這こ方かたへ来きるる。思おもひぬ。大だい漢かん奴やつの驚おどろ
 慌あわて。剥むもも。果はるる。岐ま路ち走はりて。あららるる。けり。話わ合あ頭あたま于を。茲こゝ復また大だい江え杜と
 四よ郎らう成せい勝しょう。峯かみ張ちやう六ろく郎らう通つう能のうの。曩なほ小こ江え濃のうの境さかいを。長なが橋はし象ぞう船ふねの兩りやう少せう
 年ねん小こ別べつととより。鬼おにとと。水みづ簪かんざし其その信しん濃のう路ぢと過かるる。程ほど小こ岐ま路ちの通つう能のうの父ちちへ
 けり。九く四し藏ざう通つう世せいの。舊ふる里さと也なり。今いまも木き曾そう生せいの居い城じやうあり。も既すでに許ゆるすの。歳さい月げつと
 歷へて。故こ舊きう親しん族ぞく鬼おに籍せき小こ入いり。ぬ訪うりやうふとも相あ識しあり。も。渡わた莫な故こ香かう華け院いん
 也なり。我われ先せん祖その墓はかるる。と。豫よはらいと心こゝろ當あたりて。其その山やま院いん小こ話わ詰つめて。成せい勝しょうと
 共とも侶りよ小こ住ぢゆう持ぢの法ほふ師し小こ對たい面めんあり。由よし緒ちゆうと告つげ。宿しゆく意いと演えんて。峯かみ張ちやう生せい先せん
 靈れいの為ため小こ永えい年ねん不ふ朽くの墓はか所ところ料りやうと寄よ進しんして。且かつ追お薦せんの讀よみ。經きやうと誂あけ。其その主しゆ僕ぼくと
 其その布ふ施せも亦また淺あくくね。住ぢゆう持ぢの法ほふ師し飲いん養やうて。茶ちやと薦せんめ。寂じやく庵あんを儲たくわへ。其その主しゆ僕ぼくと
 歎なげ待まちち。件けんの法ほふ師し延えん果くわるる。と。口くち管くわん留りゆうめて。己おのれが成せい勝しょうも通つう能のうも去き向かうを



十七



旅するに四五日這里の程に留の程に任持の這両主僕の武者修行
 と少知りて。有一日語次が成勝を対ひて。各位の弱冠なる武者修
 行の諸國を遊歴するにあたり。野村堂に於ける。上野甘樂郡の長
 坂の兩村の昔より力士とせり。鎌倉將軍家朝の時秩父重忠と
 力もて。項骨を折らむと死は長居願望するが方。其の被村も出さる小やあり。
 その餘波を。今も角力白打の事と。よく武藝と好む者。是ありと。その
 なる。試み。とのひけり。是より成勝通能の上野甘樂に赴けり。
 路程立合阪と喚做したる地方を。憶も逆旅の悩る孝女と其父の
 邂逅の話説あり。綉像と茲に出まの。櫛數涯あれ。晝が。其文
 猶。又卷を更めて。且下回。解分るを。聽候か。

新局玉石童子訓卷之十九終

